まんまでえーやん ⑥

定時制・湊川高校の春

水平の視点

揺るがぬ教育をすべての子に

1枚の資料が残されている。《明日から授業に「朝鮮語」が取り入れられます》

1973年、湊川高校に「朝鮮語」が必修科目として導入された。全国の公立高校では初めてだった。

全校生徒に配られた資料に、その目的が記されている。「朝鮮語を学ぶことを通して、朝鮮民族だけでなくすべての民族に対し、水平の関係で相手を視ることができる」―。

「言葉だけでなく、心を教えてきたつもりです。違いを認め合い、共に生きる『水平の視点』を」と語るのは、作家の方政雄（パンジョン）さん（69）＝伊丹市。同校で32年間、朝鮮語を教えた。

学校から授業を頼まれたのは85年。電気工事店で働いていた。「この私が？」。当時、朝鮮語の教員免許を持っている人は少なかったという。

「嫌になったら辞めよう」。だが、踏み出した一歩は天職につながった。

当時は十分な教材もなく、先輩教師だった在日コリアン詩人の金時鐘（キムシジョン）さんらは、自家製プリントで授業を続けていた。

教室で出会ったのは、外国籍や家庭内暴力、母子家庭、障害などさまざまな事情で「差別され、疎外されてきた子どもたち」。かたくなに心を閉ざす姿が、自分の青春時代と重なった。

日雇いの仕事を繰り返す父、雨漏りするバラック小屋での家族6人の暮らし…。朝鮮語も、自分に流れる血も、何もかもが嫌だった。通名（日本名）を名乗り、「日本人の『仮面』をかぶって生きていた」

転機は高校時代。どんな自分も認めてくれる恩師と出会った。「本当の自分でいい」。気づけば、同じ言葉を生徒たちに繰り返していた。

窃盗を重ねたり、教室で暴れたり。着任当時は荒れた子が多かったが、怒鳴らず暴力も振るわないと決めていた。「授業に出てくれてありがとう」。時に生い立ちも語りながら、朝鮮語を教えた。

「朝鮮語は就職や進学に不必要」と同僚から反発された時期もあったが、熱意がしぼむことはなかった。

退職後は、教え子たちから同窓会に誘われることが増えた。「先生、あの頃ごめんな」。「面倒かけやがって」。こんな会話が宝物だ、と笑う。

すべての子どもに、揺るぎない教育を―。湊川の伝統が、これからも続いてほしいと願う。

（末永陽子）

湊川高校での32年間の思い出を語る方政雄さん＝尼崎市内